学位論文要約

重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論に関する研究

池田吏志

Ⅰ　論文構成

序文

第１部：先行研究の検討と研究目的

第Ⅰ章　文献レビュー
第１節　美術科教育と特別支援教育の複合領域に関する研究の文献レビュー
第２節　国内における重度・重複障害児の造形活動に関する研究の文献レビュー
第１項　文献収集の方法
第２項　レビュー
第３項　考察
第３節　海外における重度・重複障害児の造形活動に関する研究の文献レビュー
第１項　文献収集の方法
第２項　レビュー
第３項　考察
第４節　特別支援教育分野における重度・重複障害児を対象とした教育に関する研究の文献レビュー
第１項　文献収集の方法
第２項　レビュー
第３項　考察
第５節　重度・重複障害児の QOL に関する研究の文献レビュー
第１項　文献収集の方法
第２項　レビュー
第３項　考察

第Ⅱ章　本研究の目的
第１節　問題の所在と研究目的
第１項　問題の所在
第２項　本研究の目的
第３項　QOL 向上を目指す理由
第２節　用語の定義
第１項　重度・重複障害児の定義
第２項　造形活動、及び作品の定義
第３項　関わりの定義
第４項　QOL の定義

第２部：重度・重複障害児を対象とした造形活動の理論的構造

第Ⅲ章　理論的枠組みとリサーチ・クエスチョン

第１節　理論的枠組み
第２節　リサーチ・クエスチョン

第Ⅳ章　研究デザイン
第１節　第２部で用いる研究方法
第１項　研究方法の検討
第２節　データ収集の方法
第１項　研究者の背景
第２項　研究対象校
第３項　データ収集の方法
第３節　データ分析の方法
第４節　妥当性と信頼性
第５節　研究倫理

第Ⅴ章　結果と考察
第１節　造形活動における児童生徒と教員との関わり
第１項　分析結果
第２項　考察
1．カテゴリーⅠ「教材教具を介した支援」
2．カテゴリーⅡ「コミュニケーション」
3．カテゴリーⅢ「社会心理的環境づくり」
第２節　造形活動における学習指導
第１項　分析結果
第２項　考察
1．カテゴリーⅣ「実態把握」
2．カテゴリーⅤ「題材開発」
3．カテゴリーⅥ「評価」
第３節　造形活動でのティーム・ティーチングにおける教員間の関わり
第１項　用語の整理
第２項　分析結果
第４項　考察
1．カテゴリーⅦ「副担当教員の役割」
2．カテゴリーⅧ「主担当教員の役割」
3．カテゴリーⅨ「教員集団の役割」
第４節　第２部の成果

第３部：重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論

第Ⅵ章　重度・重複障害児を対象とした造形活動における QOL 評価法の開発
第１節　重度・重複障害児を対象とした QOL 評価の課題

第２節　第３部で用いる QOL 評価の方法
第１項　QOL 評価の観点
第２項　QOL 評価のルーブリック
第３項　QOL 評価の手順

第Ⅶ章　第１期アクション・リサーチ
第１節　目的
第２節　仮説
第３節　実践方法
第４節　データ収集の方法
第５節　分析方法
第６節　結果
第７節　仮説検証
第８節　考察
第９節　成果と課題
第１項　成果
第２項　課題

第Ⅷ章　第２期アクション・リサーチ
第１節　目的
第２節　仮説
第３節　実践方法
第４節　データ収集の方法
第５節　分析方法
第１項　仮説検証の方法
第２項　授業改善モデル、授業改善フローチャート、授業改善チェックリスト作成の方法
第６節　結果
第７節　仮説検証
第８節　授業改善モデル、授業改善フローチャート、授業改善チェックリストの作成
第１項　質的分析の結果
第２項　授業改善の観点と理論的構造
第３項　授業改善モデル、授業改善フローチャート、授業改善チェックリスト
第９節　成果と課題
第１項　成果
第２項　課題

第Ⅸ章　第３期アクション・リサーチ
第１節　目的
第２節　仮説

第３節　実践方法
第４節　データ収集の方法
第５節　分析方法
第６節　結果
第７節　仮説検証
第８節　成果と課題
第１項　成果
第２項　課題
第９節　第３部の成果

第Ｘ章　総合考察
第１節　重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論
第２節　本研究の成果
第３節　今後に向けた示唆
第４節　本研究の限界と今後の課題

註、及び参考・引用文献

Ⅱ　論文の要旨

1. 本研究の背景と目的

近年、特別支援学校に在籍する児童生徒の障害の重度・重複化、多様化が指摘されている。全国の肢体不自由特別支援学校では、約 6 割の児童生徒が重複障害学級に在籍しており、重い障害の児童生徒に対する指導の困難を、多くの教員が感じている現状がある。

造形活動は、一般校のみならず本研究で対象とする重度・重複障害児が在籍する特別支援学校の重複障害学級でも実施されている。重度・重複障害児を対象とした造形活動に関する学術研究は進んでいるとは言い難く、国内では 1970 年代後半に始まって以降、公表された学術論文はわずかにとどまっている。海外でも、自閉症、身体障害、発達障害等の障害児・者を対象とした造形活動の研究が多く行われているのに対し、重度・重複障害児を対象とした造形活動の研究はほとんど行われていない。このように、国内外での研究成果の蓄積は少なく、体系的な指導理論も未だ示されていない。このような状況を背景とし、本研究では重度・重複障害児の QOL（Quality of Life）を高める造形活動の指導理論の構築を目的とした。

2. 各部・章の概要

本論文は、全 10 章で構成されている。

第 1 部（第Ⅰ章、第Ⅱ章）では、先行研究のレビューを行い、研究目的と用語の定義を示した。

第Ⅰ章では、美術科教育、及び特別支援教育の両分野における重度・重複障害児の造形活動に関する研究、重度・重複障害児と教員との関わりに関する研究、そして、重度・重複障害児の QOL に関する研究の文献をレビューし、研究動向と課題を示した。調査・分析の結果、国内外での重度・重複障害児を対象とした造形活動に関する研究では、身体障害に着目した文献が多く、運動機能を補助するための教材教具や制作方法に関する研究が中心であった。また、重度・重複障害児と教員との関わりに関する研究では、研究成果の汎用性に課題があること、そして、重度・重複障害児の QOL に関する研究では、重度・重複障害児を対象とした QOL 評価の明確な方法が確立していないことが明らかとなった。

第Ⅱ章では、本研究の目的を「重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論を構築すること」として設定し、本研究で使用する主要な用語である「重度・重複障害児」、「造形活動」、「作品」、「関わり」、そして、造形活動における「QOL」の定義を示した。「重度・重複障害児」とは、「コミュニケーションにおいて、言語、もしくは非言語的手段による意思疎通が困難な状態に、主として身体障害、それに加えて視覚障害、聴覚障害等他の障害を合わせ有する児童生徒」とした。重複障害学級で実施される「造形活動」とは、「児童生徒の主体性を尊重しつつ、教員による関わりを介して共同的に行われる、教材教具に働きかける活動、作品制作活動、及び鑑賞活動」とした。「作品」とは、「児童生徒が教材教具と関わった過程が色や形で視覚化された造形物」とした。また、「関わり」とは、「関わり手側の情動的な共感を基盤とし、読み取りを中心として行われる言語的・非言語的コミュニケーション、心情面の交流、そして、教材教具を介した身体的、認知的支援とそれに対する反応・表出のすべて」とした。そして、造形活動における「QOL」とは、「周囲

の人たちとの関わりを基盤とし、造形活動特有の教材教具の使用や制作工程を通して、児童生徒が意欲的に活動できると共に、自らが有する能力を最大限発揮できる状態」と定義した。

第 2 部（第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章）では、重度・重複障害児を対象とした造形活動の構造を理論化することを目的として、エスノメソドロジーを用いた質的研究を行った。

第Ⅲ章では、人間存在を相互性、関係性の中で捉えた糸賀一雄の「共感」概念、そして Vygotsky の社会文化的アプローチを理論的枠組みとし、次の 3 つのリサーチ・クエスチョンを設定した。①重度・重複障害児の造形活動における題材を介した児童生徒と教員との関わりはどのように行われているのか。②重度・重複障害児の造形活動において、教員は実態把握、題材開発、評価をどのような意図や方法で行っているのか。③重度・重複障害児の造形活動でのティーム・ティーチングにおける教員間の関わり、及び関わりがもたらす効果とはどのようなものか。

第Ⅳ章では、エスノメソドロジーに基づく研究デザインを示した。X 県内の 5 校の特別支援学校で予備調査を行い、その中から A 特別支援学校と B 特別支援学校の 2 校を本研究の対象とした。A 特別支援学校を選定した理由は、X 県内で開催される展覧会に児童生徒の作品を積極的に出品するなど、造形教育に熱心に取り組み、質の高い実践を行っているためである。B 特別支援学校を選定した理由は、重複障害学級の参与観察を行った中でも、対象となるクラスではきめ細やかな指導と配慮がなされていたためである。この 2 校を対象に、約 7 カ月間にわたって 13 回（合計約 28 時間）のフィールドワークを行い、小学部、中学部、高等部の造形活動の参与観察や授業外での教員へのインタビュー、そして作品等の視覚的資料や学習指導案等の文書の収集を行った。また、3 都府県の特別支援学校に所属する 4 名の教員に対し、約 70 分～150 分の半構造化インタビューを実施した。インタビュー対象者のうち、2 名は参与観察を行った A 特別支援学校中学部の美術主担当教員 1 名と副担当教員 1 名、3 人目は重度・重複障害児を対象とした造形活動の第一人者ともいえる教員、そして 4 人目は、造形活動の実践において児童生徒が有する能力を発揮させるための工夫を凝らした指導を行っていた筆者の元勤務校の同僚教員である。この 4 名を対象にした理由は、特別支援学校に 10 年以上勤務し、重度・重複障害児の障害特性に精通していること、そして、児童生徒一人ひとりの特性に応じた題材開発や関わりができるエキスパート教員だからである。

参与観察を行った授業の中から、本研究で定義する重度・重複障害児が在籍している A 特別支援学校高等部 1 年、中学部 1 年、中学部 2 年、そして B 特別支援学校小学部 2 年で実施された合計 7 時間の授業に関して記録ノートを作成し、4 名の教員に対するインタビューのデータに関しては逐語録を作成した。これらを、木下（2007）で提唱される“M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）”を用いて分析した。

第Ⅴ章では、分析結果として合計 43 種類の概念を生成し、これらの概念を 25 種類の下位カテゴリー、9 種類のカテゴリーとして整理した。9 種類のカテゴリーとは、重度・重複障害児と教員との関わりにおける「教材教具を介した支援」、「コミュニケーション」、「社会心理的環境づくり」、学習指導における「実態把握」、「題材開発」、「評価」、ティーム・ティーチングにおける「主担当教員の役割」、「副担当教員の役割」、「教員集団の役割」である。カテゴリーごとに概念間の相関や下位カテゴリーと概念との位置づけを検討し、重

度・重複障害児を対象とした造形活動の構造を理論化した。

第 3 部（第Ⅵ章、第Ⅶ章、第Ⅷ章、第Ⅸ章）では、重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論の構築を目的として、QOL 評価法の開発、及びアクション・リサーチを実施した。

第Ⅵ章では、アクション・リサーチ実施に先立ち、重度・重複障害児を対象とした造形活動における QOL 評価法の開発を行った。本研究では、Lynos（2005）で開発された“Life Satisfaction Matrix”を活用し、対象児の「意欲」と「能力発揮」とを評価軸とする 6 段階のルーブリックを用いた QOL 評価法を開発した。QOL 評価は、ビデオ映像の取り込みやルーブリックの作成、そして、ルーブリックを用いた評価を含む合計 11 段階の手順を経て行い、授業 1 時間当たりの児童生徒の QOL の状態や変化を量的に示す評価法を開発した。

第Ⅶ章では、第 1 期アクション・リサーチの研究成果を示した。第 1 期アクション・リサーチは、A 特別支援学校小学部 3 年 1 組（重複障害学級）に在籍する 2 名の重度・重複障害児を対象に 8 時間の仮説検証型の授業実践を行った。第 1 期では、第 2 部の研究成果で示した 9 種類のカテゴリーを「実態把握」、「題材開発」、「児童生徒と教員との関わり」、「評価」、「授業運営」の 5 項目に再編し、仮説、及びアクション・プランを策定・実施した。分析には Creswell（2007）で提唱されたミックス法の 1 つである “並行的トライアンギュレーション戦略”を用い、対象児童の QOL 評価結果、特徴的な場面の抽出・分析、教員への質問紙調査結果を比較検討することで、設定した仮説の有効性を検証した。分析の結果、本研究で設定した造形活動の指導に関する仮説には一定の有効性が認められた。また、検証後の考察により、造形活動において重度・重複障害児は「静止・微弱運動型」と「衝動・不随意運動型」の 2 つの類型に分けられること、さらに類型によって主担当教員と副担当教員の役割が異なることを示し、類型ごとの児童生徒の実態の階層と階層に応じた教員の役割を示した「実態階層・教員役割表」を作成した。

第Ⅷ章では、第 2 期アクション・リサーチの研究成果を示した。第 2 期アクション・リサーチは、第 1 期と同じ対象児童に対し、5 時間の仮説検証型の授業実践を行った。第 2 期では、第 1 期アクション・リサーチの成果と課題に基づき、重度・重複障害児の QOL を高める「授業改善」の在り方を検討した。学習指導法の仮説として「授業改善モデル」を設定し、主に児童生徒の興味関心を中心として活動内容、支援方法を修正・継続・発展させる授業改善を試みた。分析では、QOL 評価、授業ごとの活動継続時間の変化、第 1 期、及び第 2 期アクション・リサーチの QOL 評価結果比較、教員への質問紙調査、改善結果が顕著に表れた場面の抽出・分析を行い、仮説の有効性を検証した。さらに、第 2 期アクション・リサーチでは、実践中に考案した授業改善のアイデア 136 種類、学習指導計画／評価表に記載された改善に関する副担当教員の提案 10 種類、そして、授業において改善の効果が明確に表れた 8 場面を抽出し、それらを質的に分析することで、仮説で示した「授業改善モデル」を修正し、これと合わせて「授業改善フローチャート」を作成した。さらに、児童生徒の QOL 向上に繋がる省察や新たな活動展開を考案、創造するための指標として「授業改善チェックリスト」を作成した。

第Ⅸ章では、第 3 期アクション・リサーチの研究成果を示した。第 3 期では、A 特別支援学校小学部 1 年 2 組（重複障害学級）に在籍する重度・重複障害児 2 名を対象に、4 時

間の仮説検証型の授業実践を行った。第 3 期アクション・リサーチでは、第 1 期で検討した「実態把握」、「題材開発」、「児童生徒と教員との関わり」、「評価」、「授業運営」の 5 項目に、第 2 期で検討した「授業改善」を加え、合計 6 項目で仮説を設定し、有効性を検証した。その結果、設定した仮説は第 1 期、第 2 期とは異なる重度・重複障害児に対しても QOL 向上に一定の有効性が認められた。特に、実態把握の指標である「クラス内実態把握表」と「個別実態把握表」の活用、第 1 期アクション・リサーチで開発した「実態階層・教員役割表」の使用、教材教具作成の 4 段階の手順、そして第 2 期アクション・リサーチで開発した授業改善の指標の活用が、重度・重複障害児の QOL 向上に直接的・間接的に有効であることが示された。また、第 3 期アクション・リサーチの成果として「実態の二層性モデル」を作成し、実態把握には題材実施前に行う「確定的実態の把握」と題材実施中に行う「変動的実態の把握」が必要であることを示した。

第 X 章では、第 1 部、第 2 部、第 3 部の研究成果を総合し、重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論を構築した。本研究の指導理論は、①「確定的実態の把握」、②「題材開発」、③「授業実践」、④「評価」、⑤「変動的実態の把握」、⑥「授業改善」の 6 項目で構成される。各項目の概要は次の通りである。

①「確定的実態の把握」では、児童生徒のコミュニケーションレベルと上半身の運動機能レベルの把握、クラスに在籍する児童生徒全員の実態の分散状況の把握、そして、児童生徒の興味関心、現存機能、及びそれらが現れる環境や条件を把握することが有効であることを示した。②「題材開発」では、重複障害学級における造形活動の題材の条件として、重度・重複障害児が有する多種多様な障害特性におおよそ適合可能な題材であること、そして児童生徒一人ひとりの個別の実態に応じた教材教具の作成が必要であることを示した。また、教材教具は、1）興味関心の発見、2）要素の抽出、3）バリエーションの考案、4）アフォーダンスの予測の 4 段階で作成することが有効であるとした。③「授業実践」では、児童生徒の類型、及び類型に応じた実態階層を把握し、把握した階層に連動する教員の役割を認識することで児童生徒の実態に合致した指導や支援が可能になることを示した。また、主担当教員が個別の児童生徒の活動内容、支援方法、学習目標を学習指導計画／評価表に記載し、授業導入時に演示・説明することで副担当教員の役割が明確化し、円滑な授業運営が可能になることを示した。④「評価」では、学習目標に基づく評価のみならず「探索的評価」の導入が重度・重複障害児の新たな現存機能や興味関心の発見に繋がること、また、副担当教員が指導内容、支援方法を評価し授業改善案を主担当教員に提案することが有効であることを示した。⑤「変動的実態の把握」では、④の評価結果の中から、特に児童生徒が興味関心を持ち意欲的に取り組めた活動内容や教材教具を次回活動に活用できる情報として焦点化すると共に、蓄積、累加することが、的確な授業改善に繋がることを示した。⑥「授業改善」では、⑤で焦点化した活動内容や教材教具に基づき第 2 期アクション・リサーチで開発した「授業改善モデル」、「授業改善フローチャート」、「授業改善チェックリスト」を用いて授業ごとに改善を繰り返すことが児童生徒の QOL 向上に繋がることを示した。

以上のように①～⑥の各項目は連動しており、共有部分を含みながら順次展開する理論構造を示した。また、同一次の第 2 時間目では、第 1 時間目の「評価」や「授業改善」を踏まえ、改良・洗練した「授業運営」、「評価」、「変動的実態の把握」が必要であることを

示した。このように、本研究では授業ごとに試行錯誤を実験的に繰り返しながら重度・重複障害児の QOL 向上を目指す指導理論を構築した。

3. 本研究の成果と課題

成果は以下の 2 点にまとめられる。

第 1 に、特別支援学校の重複障害学級における重度・重複障害児を対象とした造形活動の構造を理論化した点である。これまでの研究では、齋藤（2009）、澤井（1988）、Frances（1992）、 Henley（1992）によって、重度・重複障害児を対象とした造形活動における児童生徒と教員との関わりや学習環境整備の重要性が指摘されていた。しかし、造形活動中どのように児童生徒と教員とが関わっているのか、またどのように学習環境が整備されているのか等は明確に示されてこなかった。この状況に対し、本研究第 2 部ではエスノメソドロジーを用いた質的研究により、重度・重複障害児と教員との日常的な営為や相互行為の構造を理論化した。このことは、これまで経験知、暗黙知として認識されていた特別支援学校の重複障害学級で実施される重度・重複障害児を対象とした造形活動の明快な理解を促すと共に、第Ⅴ章で生成した 9 種類のカテゴリーを用いた多様な観点からの指導アプローチを可能にするものと考えられる。

第 2 に、重度・重複障害児の QOL を高める造形活動を体系的に指導する可能性を提示したことである。これまで、重度・重複障害児を対象とした事例研究では個別性が重視され、一人ひとりの実態やニーズの違いに応じた個別事例研究が行われてきた。この在り方について細渕（2003）は、一つの事例の成果が他の重度・重複障害児に適用できない、また、研究成果が積み上がらないという個別性が孕む問題点を指摘した。それに対し、本研究では 6 項目で構成される重度・重複障害児の QOL を高める造形活動の指導理論を示した。このことにより、対象集団が変わっても一定の質を保ちながら体系的に指導を行うことが可能になり、加えて実践研究成果の蓄積、共有、再活用が可能になるものと考えられる。

残された課題としては、一木（2012）が指摘する中長期の教育課程編成の問題がある。この点に関して、本研究で示した研究成果は造形活動に特化した範囲で適用可能な指導理論であり、年間指導計画や他の授業科目との関連性は示されていない。今後は、教育課程全体における造形活動の位置づけや意義、役割の明確化、そして、年間指導計画の編成方法に関する研究が必要であると考えられる。

Ⅲ 主要参考文献

【主要欧文文献】

Alice, H., & Kelly, F. (2014). “It’s not easy being green”: Charter schools, the arts, and students with diverse needs. *Arts Education Policy Review*, 115 (2), pp.44-51.

Alice, W. (2014). Reaching Higher? The impact of the common core state standards on the visual arts, poverty, and disabilities. *Arts Education Policy Review*, 115 (2), pp.52-61.

Alida, A. (2014). *Arts integration and special education*. New York, NY: Rautledge.

American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical Manual of mental disorders fifth edition: DSM - 5™*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing.

Andra, L. N., & Anne, M. J. (Eds.). (1999). *Issues and approaches to art for students with special needs*. Reston, VA: National Art Education Association.

Annette, V. D. P., & Carila, V. (2009). The content of support of persons with profound intellectual and multiple disabilities: An analysis of the number and content of goals in the education programs. *Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities*, 22, pp.391-394.

Annette, V. D. P., & Carila, V. (2011). Day services for people with profound intellectual and multiple disabilities: An analysis of thematically organized activities. *Journal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*, 8(1), pp.10-17.

Baer, B. (1981). *An exploration of creative expression and relaxation as stress-resolving experiences: Some special implications for chronically ill and severely disabled populations.* (Doctoral dissertation). ProQuest Dissertations and Theses Database. (UMI No. 8121765)

Bethards, C. M. (2003). *Configuring a vision for art-making with students who have disabilities.* (Doctoral dissertation). ProQuest Dissertations and Theses Database. (UMI No. 3114342)

Beverly, L. G., & Doris, M. G. (Eds.). (2006). *Reaching and teaching: Students with special needs through art*. Reston, VA: National Art Education Association.

Blandy, D. (1991). Conceptions of disability: Toward a sociopolitical orientation to disability for art education: A Journal of issues and research in art education. *Studies in Art Education*, 32(3), pp.131-144.

Butterworth, J., Steere, D. E., & Whitney-Thomas, J. (1997). Using person-centered planning to address personal quality of life. In Schalock, R. L. (Ed.), *Quality of Life, Vol. Ⅱ : Applications to Persons with Disabilities.* (pp.5-24). Washington, DC: American association on mental retardation.

Clurman, B. (1987). Fighting for education rights: Severely disabled children can benefit from education. *The Exceptional Parent*, 17(4), pp.48-56.

Common core state standard initiative. (n.d.). Reviewed January 5, 2016, from

http://www.corestandards.org/

David, R. H. (1992). *Exceptional children: Exceptional art teaching art to special needs*. Worcester, MA: Davis Publications, Inc.

Derby, J. (2011). Disability studies and art education. *Studies in Art Education*, 52 (2), pp.94-111.

Doris, M.G. (1994). Students with disabilities in the art classroom: How prepared are we?. *Studies in Art Education*, 36(1), pp.44-56.

Edith, D. C. (1982). A visual arts program for enhancement of the body image. *Journal of Learning Disabilities*, 15(7), pp.399-405.

Elina, K. K., & Raija, A. P. (2009). Teaching methods and curriculum models used in Finland in the education of students diagnosed with having severe/profound intellectual disabilities. *British Journal of Learning Disabilities*, 38, pp.175-179.

Frances, E. A. (1992). *Art for all the children: Approaches to art therapy for children with disabilities.* Springfield, IL: Charles C Thomas Publisher.

Graham, C. Y. (2008). Autonomy of artistic expression for adult learners with disabilities. *International Journal of Art & Design Education*, 27(2), pp.116-123.

Harold, L. K., & Polansky, M. (2003). Measurement of observer agreement. *Radiology 2003*, 228, pp.303-308.

Ho, K. (2010). Mural painting as inclusive art learning experience. *Teaching Artist Journal*, 8(2), pp.67-76.

Jan, M. (2008). The art of inclusion. *Canadian Review of Art Education*, 35, pp.75-98.

Jennifer, E. (2007). Just looking and staring back: Challenging ableism through disability performance art. *Studies in Art Education*, 49(1), pp.7-22.

Julia, K. (1998). Ice age art, autism, and vision: How we see/ How we draw. *Studies in Art Education*, 39(2), pp.117-131.

Landism, J. R., & Koch, G. G. (1977). The measurement of observer agreement for categorical date. *Biometrics*, 33, pp.159-174.

Lynos, G. (2005). The life satisfaction matrix: An instrument and procedure for assessing the subjective quality of life of individuals with profound multiple disabilities. *Journal of Intellectual Disability Research*, 49(10), pp.766-769.

Margaret, T. (2005). Access and support in the development of a visual language: Arts education and disabled students. *International Journal of Art & Design Education*, 24(3), pp.325-333.

Mason, C. Y., & Steedly, K. M. (2006). Rubrics and an arts integration community of practice. *Teaching Exceptional Children*, 39(1), pp.36-43.

McPhail, J. C., Pierson, J. M., & Goodman, J. (2004). Creating partnerships for complex learning: The dynamics of an interest-based apprenticeship in the art of sculpture. *Curriculum Inquiry*, 34(4), pp.463-493.

Metza, L. S., Swensen, A. R., & Flood, E. M. (2004). Assessment of health-related quality of life in children: A review of conceptual methodological, and regulatory

issues. *Value in Health*, 7, pp.79-92.
Nakken, H., & Vlaskamp, C. (2007). A need for a taxonomy for profound intellectual and multiple disabilities. *Journal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*, 4(2), pp.83-87.
Ryan, M. H. (2014). Intersections between school reform, the arts, and special education: The children left behind. *Arts Education Policy Review*, 115(2), pp.35-38.
Sailor, W., Gee, K., Goetz, L., & Graham, N. (1988). Progress in educating students with the most severe disabilities: Is there any?. *Journal of the Association for Persons with Severe Handicaps*, 13, pp.87-99.
Schalock, R. L. (Eds.). (1996). *Quality of life, vol. I : Conceptualization and measurement*. Washington, DC : American Association on Mental Retardation.
Schalock, R. L., Brown, I., Brown, R., Cummins, R. A., Felce, D., Matikka, L., Keith, K. D., & Parmentaer, T. (2002). Conceptualization and measurement, and application of quality of life for people with intellectual disabilities: Report of an international panel or experts. *Mental Retardation*, 40(6), pp.457-470.
Shalock, R. L., & Verdugo, M. A. (2002). *Handbook on quality of life for human service practitioners.* Washington, DC: American Association on Mental Retardation.
Sharon, M. M., & Lynne, B. S. (2014). Examining the Intersection of Arts Education and Special Education. *Arts Education Policy Review*, 115(2), pp.39-43.
Sondra, B. G. (1975). An art-based remediation program for children with learning disabilities. *Studies in Art Education*, 17(1), pp.55-67.
The John F. Kennedy Center for the Performing Arts. *The international organization on arts and disability.* Reviewed January 5, 2016, from http://www.kennedy-center.org/education/vsa/
Vlaskamp, C., Hiemstra, S. J. & Wiersma, L. A. (2007). Becoming aware of what you know or need to know or need to know; gathering client and context characteristics in day service for person with profound intellectual and multiple disabilities. *Journal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*, 4, pp.97-103.
World Health Organization. (2001). *International classification of functioning, disability and health: Final draft full version.* Reviewed January 5, 2016, from http://unstats.un.org/unsd/disability/pdfs/ac.81-b4.pdf

【主要和文文献】

姉崎弘（2007）『重度・重複障害児の教育 第２版』、大学教育出版
飯野順子編（2005）『障害の重い子どもの授業づくり』、ジアース教育新社
池田吏志（2006）「肢体不自由養護学校における美術－生徒の実態を基盤とした拡大的手法による教材作り－」『教育美術』、770、pp.40-57
池田吏志（2012）「肢体不自由特別支援学校の美術－感触遊びの延長としての作品作り」『大学美術教育学会誌』、44、pp.63-70
石部元雄、柳本雄次編（2011）『特別支援教育 理解と推進のために（改訂版）』、福村出版

一木薫（2012）「重複障害教育におけるカリキュラム研究の到達点と課題」『特殊教育学研究』、50（1）、pp.75-85
糸賀一雄（1955）「精神薄弱児と美術教育」『美術手帖』、95 臨時増刊、pp.64-65
糸賀一雄（1965）『この子らを世の光に』、柏樹社
糸賀一雄（2009）『糸賀一雄の最後の講義－愛と共感の教育－』、中川書店
岩屋力、飛松好子（2005）『障害と活動の測定・評価ハンドブック－機能から QOL まで』、南江堂
ヴィゴツキー（L. S. Vygotsky）著、柴田義松、宮坂琇子訳（2006）『障害児発達・教育論集』、新読書社
漆崎一朗、栗原稔監修（1996）『QOL その概念から応用まで』、シュプリンガー・フェアクラーク東京
遠藤司（2006）『重障児の身体と世界』、風間書房
大島一良（1971）「重症心身障害の基本的問題」『公衆衛生』、35、pp.648-655
太田正己（1993）「授業設計における授業批評の影響－重度重複障害児の授業を通して－」『特殊教育学研究』、30（5）、pp.1-9
大竹真千英（1997）「重度重複障害児の美術教育 身近な素材を利用しての試み」『肢体不自由教育』、131、pp.52-57
大沼直樹（2002）『重度・重複障害児の興味の開発法』、明治図書
岡澤慎一（2012）「超重症児への教育的対応に関する研究動向」『特殊教育学研究』、50（2）、pp.205-214
片桐和雄（1993）「重度重複障害児の発達生理心理学の課題」『特殊教育学研究』、31（3）、pp.57-62
金山和彦（2000）「重症心身障害児の造形活動について 施設における陶芸指導の現状と課題からの考察」『美術教育』、280、pp.46-54
ガーフィンケル（H. Garfinkel）著、山田富秋、好井裕明、山崎敬一編訳（1987）『エスノメソドロジー 社会学的思考の解体』、せりか書房
川住隆一（1998）「生命活動の極めて脆弱な重複障害児の健康管理に関する課題と研究動向」『特殊教育学研究』、36（3）、pp.41-49
川住隆一（1999）『生命活動の脆弱な重度・重複障害児への教育的対応に関する実践的研究』、風間書房
川間弘子、川間健之介（2001）「重度・重複障害児の個別指導における教師の視点カテゴリーの作成」『山口大学教育学部研究論叢』、3（51）、pp.137-145
木澤愛子（2010）「重度重複クラスの図工 草花で表現するフラワーアレンジメント」『みんなのねがい』、515、pp.28-30
岸田由佳、大谷正人（2010）「特別支援教育におけるアートセラピー的アプローチの可能性」『三重大学教育学部研究紀要』、61、pp.219-249
木代喜司（1993）「障害児の指導実践から美術教育の原点を考える 京都府の養護学校における重度重複障害児の美術指導から美術教育の根源的基礎を考察する」『美術教育学』、14、pp.65-75
北島喜夫（2006）「重症心身障害児のコミュニケーション指導の視点」『障害者問題研究』、

33（4）、pp.283-290
北島善夫（2009）『重症心身障害児・者における期待反応の発達と援助』、風間書房
ギブソン（J. J. Gibson）著、佐々木正人、古山宣洋、三島博之監訳（2011）『生態学的知覚システム 感性をとらえなおす』、東京大学出版会
木下康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』、弘文堂
教育美術振興会（1961）「特集 忘れられた子どもたち」『教育美術』、1961 年 10 月号
教育美術振興会（1972）「特集 「美術教育の役割」－我が国の特殊教育について」『教育美術』、1972 年 7 月号
教育美術振興会（1973）「特集 障害児の心と表現」『教育美術』、1973 年 7 月号
教育美術振興会（1981）「特集 「障害児教育の可能性」－美術教育の視点から」『教育美術』、1981 年 6 月号
鯨岡峻（1990）「コミュニケーションの成立過程における大人の役割－乳児－母親および障害児－関与者のあいだにみられる原初的コミュニケーション関係の構造－」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』、24（1）、pp.47-60
鯨岡峻（1998）「関係発達論と原初的コミュニケーション」『乳幼児医学・心理学研究』、7（1）、pp.11-25
鯨岡峻（2000）『養護学校は、いま』、ミネルヴァ書房
鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門　実践と質的研究のために』、東京大学出版会
口分田政夫（2009）『障害者自立支援法下での重症心身障害児・肢体不自由児等の障害程度に関する客観的な評価指標の開発に関する研究』、厚生労働省科学研究費補助金報告書
クレスウェル（J. W. Creswell）、操華子、森岡崇（2007）『研究デザイン－質的・量的・そしてミックス法－』、日本看護協会出版会
小池敏英、雲井未歓、吉田友紀、阿部智子（2011）「肢体不自由特別支援学校における重度・重複障害児のコミュニケーション学習の習得状況の把握に関する研究－把握手続きの信頼性と妥当性について－」『発達障害研究』、33（1）、pp.105-117
洪浄淑、松谷勝宏、中村満紀男（2001）「糸賀一雄の「共感」思想に関する考察」『心身障害学研究』、25、pp.77-87
郷間英世、伊丹直美（2005）「微笑行動を手がかりとした重症心身障害児の QOL 評価に関する検討」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』、14、pp.29-35
国立特殊教育総合研究所（2005）『ICF（国際生活機能分類）活用の試み』、ジアース教育新社
齋藤武博（2003）「P・ドライポイント 2002」『教育美術』、732、pp.56-57
齋藤武博（2008）「肢体不自由児の造形活動～医療的ケアを絡めた授業の姿～」『子どもと美術』、46、pp.57-59
齋藤武博（2009）「「え？まだやるの？もう、授業はおわりなんですけど…」～筋疾患の生徒の造形活動～」『子どもと美術』、65、pp.58-61
坂口しおり（1994）「重度重複障害児へのコミュニケーション指導の試みーインリアル分析の複数担任指導への応用－」『特殊教育学研究』、31（5）、pp.55-61
坂本茂、平田聖子、野方由美子、柳本雄次（1993）「重度・重複障害児のコミュニケーシ

ョン活動に関する研究－子どもの微笑み・笑顔を引き出す題材の検討－」『筑波大学養護・訓練研究』、6、pp.9-15
佐々木正人、松野孝一郎、三島博之（1997）『アフォーダンス』、青土社
笹原未来（2012）『重度・重複障害児（者）の探索行動の促進に関する実践的研究』、東北大学博士論文、甲第 14332 号
佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法 原理・方法・実践』、新曜社
佐野正之編（2000）『アクション・リサーチのすすめ』、大修館書店
澤井和美（1988）「花咲き山をつくろう」『子どもと美術』、17、pp.49-53
シャロック（R. L. Shalock）著、三谷嘉明、岩崎正子訳（1994）『知的障害・発達障害を持つ人の QOL』、医歯薬出版株式会社
シュワント（T. A. schwandt）著、伊藤勇、徳川直人、内田健訳（2009）『質的研究用語事典』、北大路書房
進一鷹（1993）『重度・重複障害児の発達援助技法の開発』、九州大学博士論文、乙第 5887 号
新開義則、郷間英世（2006）「知的障害と肢体不自由を併せ持つ学齢障害児の QOL 評価に関する研究」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』、15、pp.47-52
末光茂、土岐覚（1997）「重症心身障害児施設における QOL に関する研究－「施設チェックリスト」の試用経験から」『川崎医療福祉学会誌』、7（1）、pp.59-66
ストラウス（A. Strauss）、コービン（J. Corbin）著、操華子、盛岡崇訳（2004）『質的研究の基礎：グラウンデッドセオリー開発の技法と手順（第 2 版）』、医学書院
鈴木康之、舟橋満寿子、長博雪、許斐博史、志倉圭子（1995）「いわゆる“超重度障害児”の実態調査－東京都地区、1993 年度調査から－」『脳と発達』、27（1）、pp.58-60
全国特別支援学校肢体不自由教育校長会著、下山直人、村田茂、西川公司、川間健之介、小池敏英、石川政孝、 齊藤由美子、飯野順子（監修）（2011）『障害の重い子どもの指導 Q&A』、ジアース教育新社
全国障害者問題研究会（2010）「特集　障害のある人の造形活動」『みんなのねがい』、2010 年 1 月号
高木尚（2006）「重症児のコミュニケーションと指導」『障害者問題研究』、33（4）、pp.296-301
高野美由紀、有働眞理子（2010）「特別支援学校のティーム・ティーチングにみられるインターラクション」『兵庫教育大学研究紀要』、36、pp.53-60
高橋晃（1974）「重度・重複障害児教育の実践－随伴障害の顕著な脳性まひ児の造形活動とその指導－」『季刊－特殊教育』、3、pp.27-36
高橋晃（1976）「脳性まひ児の表現学習とその指導」『教育美術』、37、pp.23-34
高橋晃（1980）「脳性マヒ児と美術教育（Ⅳ）－「教科」と「養護・訓練」における学習の連続性－（その 1）」『筑波大学附属桐が丘養護学校研究紀要』、16、pp.23-37
卓展正（2000）『知的障害者における美術教育：色彩表現教材の開発研究』、東京学芸大学博士論文、甲第 18 号
竹内まり子（2010）「特別支援教育を巡る近年の動向」『調査と情報－ISSUE BRIEF－』、684、pp.1-12
竹田契一、里見恵子（1994）『インリアル・アプローチ』、日本文化科学社

竹田艶子（1997）「肢体不自由児における描画用具の一考察」『大学美術教育学会誌』、30、pp.317-326
田村一二（1974）『ちえおくれと歩く男』、柏樹社
土谷良巳（2011）「欧州における先天性盲ろうの子どもとの共創コミュニケーションアプローチ」『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』、17、pp.1-11
鄭梃甄 （2010）『自閉症児を対象とした美術教育指導法に関する実践的研究：日本と台湾における調査を基盤として』、東京芸術大学博士論文、甲第 443 号
徳永豊（2009）『重度・重複障害児の対人相互交渉における共同注意－コミュニケーション行動の基盤について』、慶應義塾大学出版会
中田基昭（1983）『重症心身障害児の教育方法研究：現象学に基づく経験構造の解明』、東京大学博士論文、甲第 5950 号
長沼俊夫（2005）「チームティーチングによる授業づくり（1）現状と課題」『肢体不自由教育』、170、pp.42-45
奈良峰博・星野常夫（2007）「知的障害養護学校における図画工作・美術の歴史に関する研究－施設における造形表現活動との比較による－」『文教大学教育学部紀要』、41、pp.5-19
任龍在、池田彩乃、安藤隆男（2009）「肢体不自由教育と病弱教育における重度・重複障害教育の研究動向と課題－日本特殊教育学会発表論文集に着目して－」『筑波大学特別支援教育研究』、4、pp.19-23
野崎義和、川住隆一（2012）「「超重症児」該当児童生徒の指導において特別支援学校教師が抱える困難さとその背景」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』、60（2）、pp.225-241
パウリン（J. Pawlyn）、カーナビー（S. Carnaby）著、中川栄二、小林巌監訳（2011）『最重度知的障害および重複障害の理解と対応』、診断と治療社
美育文化協会（1983）「特集　障害児と美術教育」『美育文化』、1983 年 12 月号
美術教育を進める会（1988）「特集　障害の子らと歩む」『子どもと美術』、17
美術教育を進める会編（1991）『人格の形成と美術教育③ 障害児の美術教育』、あゆみ出版
兵庫県重症心身障害児教育研究集会実行委員会編（2004）『重症児教育　視点・実践・福祉・医療との連携』、かもがわ出版
平野日出男（1984）『重複障害児の教育』、青木書店
福田智恵（1998）「子どもたち、先生たちとしっかり手をつないで　お気に入りの道具づくり」『子どもと美術』、43、pp.30-34
藤岡一郎（2000）『重症児の QOL－「医療的ケアガイド」』、クリエイツかもがわ
藤原正人編、久里浜の教育同人会（1982）『重度・重複障害児の教育－久里浜養護学校の教育実践報告－』、光生館
フリック（U. Flick）著、小田博志監訳（2011）『質的研究入門　＜人間の科学＞のための方法論』、春秋社
細渕富夫（1996）「重度・重複障害児のコミュニケーション研究をめぐる諸問題 乳児研究からのアプローチ」『障害者問題研究』、23（4）、pp.307-314

細渕富夫（2003）『重症心身障害児における定位・探索行動の形成』、風間書房
前芝武史（2005）「肢体不自由養護学校における彫塑領域の教育実践と考察－筑波大学附属桐が丘養護学校本校高等部 1 年 A コースでの実践を通して」『美術教育学』、26、pp.359-375
蒔苗正樹（2009）「重度重複障害児の美術表現－感じること、気づくことを育てる－」『肢体不自由教育』、190、pp.52-53
マーティンズ（D. H. Mertens）、マックローリン（J. A. McLaughlin）著、中野善達、佐藤至英訳（1995）『障害児教育の研究法』、田研出版
松田直（2002）「重度・重複障害児に関する教育実践研究の現状と課題」『特殊教育学研究』、40（3）、pp.341-347
松田直（2010）「重度・重複障害児における実践研究のこれまでとこれから：係わり手の在り方の省察を視点として（教育講演 2　日本特殊教育学会第 47 回大会公開教育講演報告）」『特殊教育学研究』、47（5）、pp.324-326
松原隆三、宮崎直男（1985）『重度障害児の指導』、福村出版
三木裕和、原田文孝（2009）『重症児の授業作り』、クリエイツかもがわ
宮武宏治、高原望（1991）「重度・重複障害児と教師の相互関係の変容過程の分析」『特殊教育学研究』、29（2）、pp.53-67
村上美奈子（2004）「重度・重複障害児の QOL と肢体不自由養護学校における実践－「特別支援教育」への移行と重度・重複障害児の教育保障に関して－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』、44、pp.65-72
メリアム（S. B. Merriam）著、堀薫夫、久保真人、成島美弥訳（2004）『質的調査法入門－教育における調査法とケース・スタディー－』、ミネルヴァ書房
茂木一司（2004）「平成 15 年度群馬大学教育学部フレンドシップ事業「あさひ de アート」障害児のためのメディアアートワークショップ（平成 15 年 12 月 7 日、於群馬県立あさひ養護学校、桐生市）」『教育美術』、743、教育美術振興会、pp.60-61
元田美幸、藤田継道、成田滋（2002）「重症心身障害児施設における利用者と介助者のコミュニケーション－セルフモニタリングチェック紙の効果－」『特殊教育学研究』、40（4）、pp.389-399
文部科学省（2009）『特別支援学校学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）』、教育出版
文部省（1971）『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について』
文部省（1975）『重度・重複障害児に対する学校教育の在り方について』
柳本雄次、坂本茂、竹内聖子、神田晴江（1989）「重度・重複障害児の非言語コミュニケーションに関する研究－情動的コミュニケーションの特徴と指導による変化－」『養護・訓練研究』、2、pp.33-40
吉川明守、宮崎隆穂（2008）「重度・重複障害者における QOL 評価法の検討」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』、38、pp.147-153
芳野正昭、村上大樹（2007）「重度・重複障碍児・者とのコミュニケーションにおける教師の「読み誤り」に関する検討」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』、11（2）、pp.31-38
若元澄男編（2000）『図画工作・美術科　重要用語 300 の基礎知識』、明治図書